

5. オウトウ園における復旧の進め方

1) 成木の被害状況

県内での成木の樹形は、

①骨格となる主枝が配置された、開心形またはそれに準じた樹形

②主幹形をベースとした、明確な骨格(主枝)の無い樹形

の2種類に大別できると思われまます。

今回の豪雪による被害の状況は樹形により異っており、①では主枝先端や、主枝基部から発出した結果枝(特に下垂枝)の枝折れが多く(図50)、②では樹冠内の枝の混んでいる部分に雪が被さり、その重みで枝の分岐部など多様な部位で枝折れが生じています(図51、52)。

なお、①の樹形では主枝が大規模に欠損している園地は少ないため、被害の程度は②の樹形の方が大きいと思われまます。



図50 主枝が明確な園地



図51 枝が多く冠雪が大きくなった状態

2) 成木の復旧方法

オウトウは雨除けハウス内で栽培されており、また、成木では根域も広いことから、改植は容易な作業ではありません。

そのため、被害の少ない枝は最大限残し、樹形の復旧をはかる必要があります。

ただし、急激な枝の減少による樹勢への影響を避けるため、被害枝の処理は慎重に行ってください。



図52 枝が大きく欠損した木

①に示した「主枝が明確で開心形またはそれに準じた樹形」ではア. 主枝の分岐部が裂開したときは支柱を添え、ボルトやカスガイ、縄で補強し、癒合を促します。主枝と主幹の接合部位が1/3以上残っていれば回復の可能性があります。

ただし、このようになった枝は強度が弱いため長期使用には向きません。そのため、近くに新たな主枝を育成し、被害枝は順次縮小することで5年程度をかけて更新を進めてください。

イ. 裂開程度が激しく、ア. の方法で癒合が見込めない主枝は、

そのまま放置せず、被害枝を切り落とし、切り口に塗布剤を塗ります。

この場合、被害枝の処理だけで極端な強剪定になってしまうため、残った枝の剪定は混んだ結果枝の整理程度にとどめ、できるだけ枝を残すようにしてください。

ウ．結果枝の折損の多い樹では、結実の確保と樹勢の反発を防ぐため、摘芽は行わないか軽く行う程度(2～3芽)にします。

②に示した「主幹形を基にした明確な骨格(主枝)の無い樹形」ではア．被害を受けた側枝で、樹皮の裂開が2/3以下であれば亀裂部に塗布剤を塗り、枝を吊り上げて固定することで、当年の利用が可能です。ただし、強度が弱いため長期の利用はできません。

イ．樹皮の裂開が2/3以上の場合は枝を切り取り塗布剤を塗ります。

ウ．被害の少ない樹では、来年度以降の被害を軽減するために、混み入った枝を整理し樹形を作り直してください。

3) 若木(7年生程度まで)の復旧方法

①幼木(3～4年生まで)：

枝の折損が全体の2割以上発生した時や主幹が折れた時は、主幹を切り戻して新たに枝を出し直します。

②若木(7年生程度まで)：

オウトウでは強剪定後は強い枝が出やすく、誘引を行っても枝を落ち着かせることが難しいため、樹形の再構築が困難になるという特徴があります。

そのため、全体の5割以上の側枝が折れた時や主枝候補枝とその周辺の枝の大部分が失われた時は改植を行った方が効率的です。

4) 被害園地における施肥について

主枝が裂開、折損により失われている樹、側枝の損傷や短果枝の欠落が多くみられる場合は、春肥の施用は控えましょう。

生育期の樹勢に応じて、礼肥(7月)や秋肥(9月)の調節を行いましょう。

根部に野ネズミの食害を受け樹勢が弱った場合は、盛り土や堆肥マルチ等を行って発根を促しましょう。また、生育期間中に過度の乾燥を防止するために適時灌水を実施しましょう。